



大阪府保育士会だより

ほほえみ

令和2年
11月1日
123&124
合併号

発行 大阪府社会福祉協議会 保育部会・保育士会 大阪市中央区中寺1-1-54 ☎ 06-6762-9001

コロナ禍で

見つけた素敵なお心

〜共に乗り切る保育現場〜

小学生の兄姉と当園に通う4歳児の3人のお母さんであるAさん。緊急事態宣言の前後に特別保育を申請されました。

Aさんの仕事は介護職。新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）拡大の中で出勤せざるを得ませんでした。園としても受け入れをしましたが、Aさんには持病があり人と人が向き合うことを基本とする仕事上、コロナに感染すれば命に関わるとご本人も困っておられました。

Aさんは、特別保育の申請時「先生、すいません。私も怖いのですがどうして出勤しないと人がいないので仕方なくて、本当にこんなたいへんな中、先生方にも迷惑をかけて本当にすいません」と今までそういつた気遣いを見せたことはあ

りませんでした。

私が、「お母さん、いいですよ。お子さんのことは任せて。それよりも、あなたのほうがたいへんでしょう。十分に気を付けて頑張ってくださいね」と返すと「ありがとうございます。本当にすいません」と涙ぐみながら仕事に向かわれました。

お迎えに来られた時にも「先生、すいませんでした。ありがとうございます。伝えたくて感謝の気もちを伝えてくれました。私だけでなく担任や他の先生たちもAさんの言動の変化に少しの驚きと同時に自分たちの仕事の重さを再認識した時でした。

また、3人兄姉の末っ子である4歳児は甘えん坊で少し落ち着きがなかったのですが、お話がきちんとできるようになりました。若くして母となったAさ

んの子育てを支えてきました。3人の子どものことを思う保護者に専門職である保育者としてできることはしっかりやらねばと強く感じました。

命を懸けながら、保護者と保育者が連携し、大切な子どもたちの最善の利益のために頑張っているという気持ちを話すと

保護者の意識を変えたコロナ、いまだ感染のリスクはありますが共に頑張っていると思います。

（国分保育園 伊藤裕子）



〜子どもたちの未来のために〜

緊急事態宣言を受け、当園は4月15日から原則休園になり、医療・福祉従事者他、特定の家庭のみの保育がはじまりました。特に医療従事者の方からは緊迫感が感じられました。

朝は「いつてらっしゃい」「気をつけて」「拍手！」祈る気持ちで送り出し、夕方は「お帰りなさい」「お疲れさま」と笑顔で迎える毎日でした。また、ホームページで「安心・安全に保育するのはかなり厳しくなっている状態です。マスク・アルコールも不足しています」と伝えると、貴重なマスクやアルコールを寄付して下さったり、卒園児やその保護者の方々に励ましや労いの手紙が届きました。たくさんの方々に支えていただいている有難さと人のつながりの心強さを改めて痛感する機会になりました。

〈保護者からの声を〉

一部ご紹介します

こんな大変な状況の中、子どもを守って私たち保護者を支えていただきありが

とうございます。医療従事者として現場に立てているのも先生方の支えがあつてのことです。毎日緊張いっぱいの中、お迎えの時「お帰りなさい」と笑顔で言つて下さるその瞬間が『医療従事者』から『母親』に戻れる瞬間です。本音を言えば仕事を休んで子どものそばに居たいです。（中略）笑って、けんかして、怒って、泣いて、食べて、寝て、また笑う、そんなごく普通の園での生活が本当に待ち遠しいです。いつも全力で子どもたちと向き合つて下さりありがとうございます。今に限らずたいへんなお仕事だと思えます。お体大切にしてください。これからもよろしくお願ひします。

コロナを通じて、大切な命私たちの仕事の意義・当たり前の大切さに感謝し、この子たちの未来のために今できることを精一杯しなければと改めて思いました。

（北野田こども園

廣谷和子）

子どもの将来に必要なスキル②

京都大学大学院
文学研究科 准教授 森口 佑介

Profile

福岡県出身。京都大学文学部、同大学院文学研究科修了、博士(文学)。専門は、発達心理学、発達認知神経科学。令和元年度大阪府「乳幼児家庭の教育力向上事業」推進会議座長を務め、子どもの「非認知能力」の育成に携わる。主著『自分をコントロールする力 非認知スキルの心理学』講談社現代新書

どの大人に抱きしめられると、赤ちゃんは安心感を得ることが出来ます。

乳児期には特に物理的な接触(くっつくこと)が大事で、これによって安心感を得ることが出来ます。

赤ちゃんは養育者の絆を築くためには、養育者側の関わりが大事です。赤ちゃんが怖い目にあつて泣くとき、養育者側の反応もさまざまです。ちよつとくらい泣いてもいいやと思う養育者もいれば、泣いたらすぐに抱っこする養育者もいるでしょう。このような関わりを通して、赤ちゃんは養育者との関係には個人差が生まれます。自分が泣いても養育者が反応してくれない場合には赤ちゃんは養育者と距離をとるようになり



大人がいることは子どもの支えになります。

●自分を「コントロールする力」

乳児期に形成されたアタッチメントは、幼児期以降の能力の発達に影響を与えます。その中で、とりわけ重要だと考えられる「自分をコントロールする力」について説明します。

私たちは、さまざまな場面で、自分をコントロールしています。食べたいものがあつたり、飲みたいものがあつても、健康のために、自分をコントロールしなければなりません。必ずしもうまくいくわけではないですが、私たちはそれなりに折り合いをつけて日常生活を送っています。

一方、子どもはなかなか自分をコントロールすることができません。面白そうなおもちゃがあつたら、食べたいおやつがあつたら、がまんできずに手を伸ばしてしまうでしょう。

ここで、がまんという言葉を使いましたが、一般的な意味での「我慢」は、人に押し付けられるイメージが強いものです。上司や教

師、親などの目上の人間によって、強いられるのが我慢です。受け身の我慢ということになります。

一方、自分をコントロールする力は、子どもが自ら進んでコントロールする能力のことです。特に、目的のために自分をコントロールするという点が大事になります。たとえば、有名なマシユマロテストは、今すぐもらえるマシユマロ1つと、15分後にもらえるマシユマロ2つの選択がある状況で、今すぐもらいたい気持ちを抑えて、15分後のマシユマロ2つを得るという目的を達成するための力を調べます。この場合、子どもは親や教師に強要されるのではなく、自ら進んでマシユマロ2つを選びとります。このような、目的のためにがまんする力が大事なのです。

最近の研究で、自分をコントロールする力が高い子どもは、そうではない子どもよりも、後に学力や対人関係、健康などに優れることが示されています。マシユマロテストに関する研究結果は疑問視されて

前回、「非認知能力」という言葉に関する状況について説明してきました。その中で、特に能力的なものに焦点をあて、「自分自身もしくは他人(家族、友人、教師など)と折り合いをつける力であること」が子どもの将来に大事であると述べました。

今回は、具体的な例として、アタッチメントや自分をコントロールする力、他人を思いやる力について見ていきたいと思います。

●アタッチメント

アタッチメントとは、赤ちゃんが他者(主に養育者)との間に築く情愛的な絆のことを指します。アタッチ

メント自体は「能力」ではないので、ここで含めることには違和感がある方もおられると思います。確かに、アタッチメントは赤ちゃんとの大人の関係であり、能力ではないのですが、アタッチメントがこれ以降に話する自分をコントロールする力と他人を思いやる力の基盤になるので、ここで簡単に紹介したいと思います。

生まれて間もない赤ちゃんは、自ら世界を探索し、知識を獲得しようとしています。このとき、赤ちゃんは、怖い目にあつたり、痛い目にあつたりすることがあるかもしれません。また、不安になることもあるでしょう。こういうときに、養育者な

こうやって養育者との間に築かれた関係は、子どもの「自分」や「他人」についての考え方の基礎になります。たとえば、養育者との間に良好な関係を築けた子どもは、「自分は他者に

愛される存在だ」「他人は自分に優しくしてくれる存在だ」と考えるようになります。養育者との間に関係性を築けない場合は「自分は愛されない存在だ」「他人は自分に意地悪をする存在だ」と考えるようになるかもしれません。

ここで、子どもの将来に大きな力が「自分自身もしくは他人と折り合いをつける力」であることを思い出してください。

アタッチメントが基盤となり、これらの力に影響を与えることになるのです。

ちなみに、養育者との間に良好な関係を築けない場合でも、子どもは保育士と良好な関係を築けます。養育者代わりにはなれないのですが、子どもにとつて信頼できる大人、自分のことを見守ってくれる



いるものの、イギリスやニュージーランドの研究がこの結果を支持しています。必要に応じて自分の行動や欲求をコントロールできる子どもは、たとえば受験勉強のときに誘惑に負けたりしないので、学力などの成績が高いのだと考えられます。

国内外の研究から、自分をコントロールする力が発達するのは4歳以降であることが示されています。

3歳以前は自分の行動をうまくコントロールできないのですが、4歳から6歳にかけてコントロールする力が身につきます。児童期から青年期にかけてもこの力は成長し続けるのですが、4歳から6歳頃にかけての成長が著しいので、重要だと考えられています。

つまり、保育園に通っている時期はとても大事な時期ということになります。

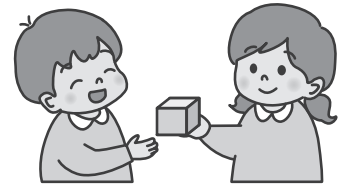
●他人を思いやる力

自分をコントロールする力とともに、子どもの将来に大事な能力としてあげられるのが他人を思いやる力です。専門的には向社会的

といいますが、自分にとって少し不利益になっても、他者に利益となるような行動のことを指します。

人間社会において、向社会的性は極めて重要です。皆が自分のことしか考えなければ、社会は成立しません。生まれたばかりの赤ちゃんでも、他の赤ちゃんが泣くと自分も泣くというように、非常に原始的なものではありますが、共感性のよくなるものが備わっています。1〜2歳頃になると、まだ未熟ではありますが、落ちていたものを拾ったり、自分より小さな子どもが泣いているときに慰めたりできるようになります。

さらに、幼児期になると、自分がもらったお菓子やシールを他の子どもに分けてあげることができるよう



になります。たとえば、ある実験では、子どもにまずシールを10枚あげます。

そのあと、別の子どもにそのシールを分けてくれてもいいし、その10枚を全部自分のものにしてもいいと告げます。ここで大事なのが、シールを分け与えるのが、見知らぬ子どもであるということなのです。

見知らぬ子どもにどれだけのシールを分け与えるのかが、関係性に依存しない、その子どもの思いやる力を示しています。

こういった実験で、見知らぬ子どもに分け与えるシールの数は年齢とともに増えていきます。

子どもの向社会的性の高さも、子どもの将来の学力や友人関係と大きく関係してきます。向社会的が高い子

どもは、友人として向社会的性が高い子どもを選ぶことが多く、お互いに向社会的で良好な友人関係を築きます。また、向社会的が高い子どもは、教師や保育士との関係もよく、よりよい指導や関わりを引き出すために、学力にもプラスになるようです。

自分をコントロールする力と同様に、この力は幼児期に大きく成長するので、保育園に通う期間が大事だということになります。

●育み方

では、これらの力はどうのようにして育むことができるのでしょうか。上述の通り、これらの能力の発達には乳児期のアタッチメントに影響を受けることが示されています。

養育者との関係において安心感を得られる子どもは、自ら世界を探索することが多く、自律性を発達させます。そういった経験を積み重ねることによって、自分で目標を達成する力や進んで他人を助ける力を発達させることができます。

一方、安全や安心を感じ

られない子ども、特に、虐待を受ける子どもは、これらの力を発達させられないことが明らかになっています。虐待の中でも、最も子どもにとって深刻な影響を与えるのが、ネグレクト(育児放棄)です。ネグレクトは、養育者と子どもの関係が全く築かれません。そのため悪影響なのです。

養育態度や保育士の関わり方も重要です。たとえば、子どもがパズルをやっているときにうまくいかないとき、このような様子を見たら養育者や保育士は、2つのタイプに分かれます。

1つは、養育者や保育士が子どもの代わりに自分でパズルのピースをはめるタイプです。2つ目は、子どもにヒントを与えるなど、子ども自身に考えさせるようなタイプです。

最近の研究では、後者のタイプのほうが、自分をコントロールする力や他人を思いやる力を育みやすいことが示されています。1つ目のタイプは、養育者や保育士主導の関わりです。

大人が子どもをコントロールするような関わり方

なので、子ども自身の自律性を育むことはできません。一方、2つ目のタイプは、子ども主導の関わりです。子どもが自分で達成することに重きをおいて子どもに関わります。

そのため、子ども自身でコントロールすることが他人を思いやることのできるようになるのです。

こういう話をすると、子どもを見守るような保育が大事だと考えるかもしれませんが、確かに、子どもが自分でやること、それを見守ることは大事です。しかしながら、見守ることは、しばしば、子どものことを放置することと混同されがちです。ですが、子どもを放置することは、保育とは言葉を尊重しつつ、しっかりと関わるのが大事です。

ぜひ日々の保育の中でも心にとめておいていただきたいと思います。

参考文献

森口佑介(2019)

自分をコントロールする力
非認知スキルの心理学
講談社現代新書

保育の玉手箱



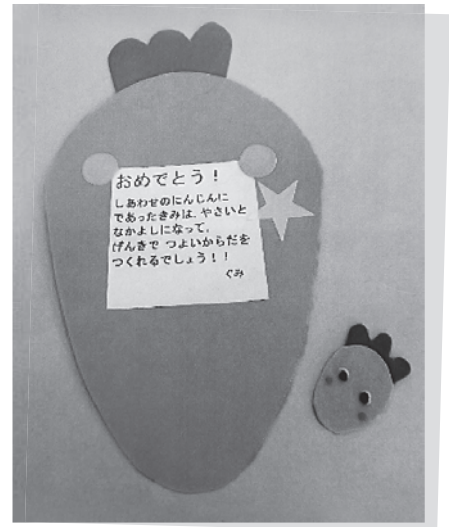
担当／河内ブロック



幸せの人参の日

園では食育の一環として、プランターで野菜を育てたり、野菜の皮むきをしたりしています。また、1カ月に1回、数人の子どものたちのカレーライスの中に星形の人参が入っていて、人参を見つけたらワッペンと表彰状がプレゼントされます。

幸せの人参の日はドキドキワクワク！見つけられたら人参とお友だちですね。



幸せの人参の表彰状とワッペン

担当／南大阪ブロック

一緒に手遊びやからだを動かして楽しめる絵本をご紹介します。

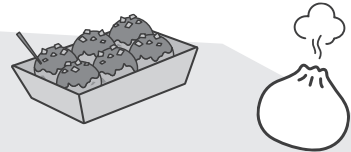
一緒に手遊びを楽しむことができる絵本

大阪うまいもんのうた 佼成出版社

作・絵：長谷川義史

「大阪にはうまいもんがいっぱいあるんやで～ たこやき ぎょうざ お好み焼き ぶたまん！」
大阪の美味しいものがいっぱい登場！

「通天閣」「かに道楽」「太陽の塔」など、街のようすも描かれていて大阪のことがよくわかります。
絵本の最後のページには、歌詞と楽譜が載っているので、一緒に歌ったり手遊びを楽しんだりできます。
1歳の小さい子どもたちも絵本を見ながらメロディーに合わせて手遊びを楽しんでいます。



一緒にからだを動かして楽しめる絵本

できるかな？あたまからつまさきまで 偕成社

作・絵：エリック・カール 訳：くどう なおこ

エリック・カールさんの絵がユニークでカラフルで面白い絵本です。

「君はできるかな？」に合わせて、きりん パファロー ギリラ あざらし わに らくだなど、いろいろな動物のポーズを全身を使って楽しめます。

CDもあり音楽に合わせて踊ることができます。



編集後記

秋も深まり、猛暑だった夏を忘れてしまいそうな心地よい季節になりました。

そろそろ冬支度を進めていく中で、忘れてはいけないことは感染症予防です。

この冬は、どのように対処すべきか、皆さまも悩まれていることと思います。まずは、子どもたちと一緒に手洗いうがいの徹底でしょうか。

今後は、新型コロナウイルスに加えインフルエンザ等の感染症と賢く共存していかなければなりません。しかし、子どもたちにとって大切なことは変わらないはずで、保育や行事もさまざまな工夫を凝らして行っているところがほとんどだと思いますが、子どもたちと一緒に楽しみましょう。

(N・Y)